

破瓜  
by A.Matsu!  
1990~Aug.29,1999  
Vertical Edition: Dec.4,2000  
Title Design: Dec.7,2000

Copyright©A.Matsu!  
Suita City

Winged-White:  
<http://www.ne.jp/asahi/winged-w/fly/>



オレはヴァージンだ。

ヴァージンといっても女のそれではない。オレは男だ。妻もいる。が、かえってそれゆえにこの揶揄が気に喰わない。すべては高度情報化社会の産物、『転ブ』がいけないのだ。

『転ブ』

省略しないで言うと『転移ブース』であり、もつときちんと言つと、『原子配列転送式物質移動システム端末ブース』である。簡単に言えば、これを使うと瞬時に他のブースへ移動できるという代物だ。

なぜか『転ブ』がシステムそのものを言う時や、『転ブする』と動詞にも使われたりしているが、それほどそこんじよそこらに回っている。ちょうど一昔前の公衆電話並みか、それ以上だ。今や一般家庭用の転ブさえ発売され、需要が多すぎて半年も予約待ちの有様だ。

ビジネスシーンにおいても、もうこれ無しには何も考えられないほどだ。転ブ普及前であれば、電話と郵便を使わないでどうやって仕事を進めるか、という議論に等しい。

当然、先んじてこの悪魔のシステムに魂を売った奴は、どんどん出世した。

追隨した奴もまあ出世した。

最近身売りの奴も、前途の保証はされた。

残ったのはごく少数の、オレみたいな奴だけだ。一番早く転ブを普及させて出世した国

破瓜

破瓜

は、言うまでもなくこの国だけだね。こんなことはどうでもいい。

要するに、なぜオレがヴァージンなのか、だ。オレは人間としての誇りを持って、まだこの『転ブ』を使っていないのだ。

何が悪い。

このシステムは一旦人間やその他の物質の原子配列を分解しながら解読して、目的地のブースにデータを転送し、そこで形成しなおすというものだ。

自分が『なんとかメカ』にでもなったみたいで気持ち悪いだろうか？ でも、人類はその気持ち悪さよりも利便性をとつちまったんだ。

だいたい事故が起こつたらどうするんだ。遺体確認できないじゃないか。実際事故も何件か、恐怖の八工男状態の恐ろしいのが起つてるんだぞ！ それでも、これはオレの反論としては使えない。事故数は他の交通手段に比べ格段に低いのだ。たまに、金歯が無くなつたりする程度らしい。

事故の無い社会。おおいに結構だ。しかし オレは思うのだ。この転ブで分解されること自体が、オレにとっては事故なんじゃないだろうか？

オレ自身は転ブに入って行き先をコールした数秒後に、この世から一番残酷な方法でそう一瞬で！ 無機質な機械の中に消えて無くなってしまうんじゃないか。実際、生命

の威厳とか以前に、オレはそれが怖いのだ。  
勇気が無いのは分かっている。でも、そんな風にいやらしい目つきでオレをヴァージン  
呼ばわりするのはやめてくれ。

素晴らしい技術であるのはオレも承知している。二十年ほど前、三次元の物体の構成を、  
ほんの一瞬で原子レベルまで解析してしまう方法が発見された。もっともこの方法は特殊  
なプラズマを照射するので、物体は完全に破壊されてしまう。おまけに情報が膨大すぎる  
ので、非常に小さなものしかデータとして扱えなかった。

この時点ではまだ日常生活にはほとんど関係がなかった。

ところがマッドな科学者はいるものだ。情報を逆の位相にしてさきほどのプラズマを照  
射し、必要な原子さえ供給すれば、いとも簡単に元の物質を再形成できる、という奇々怪々  
な論文が発表された。この論文を元に作られた試作品は、ダイヤモンドを大量生産して人  
類を興奮の渦に巻き込んだ。

時を待たず、記録するという八ミリフィルムの発想から、テレビ的 送受信するとい  
うコンセプトの転換は、転ブ時代の到来を予言した。

新橋 横浜間の転ブが開通したのは、今から十六年前のことだった。

破瓜

破瓜

だが、交通網は通信回線に置き換えられて、騒音・排ガス・ラッシュアワーもついでに無  
くなった。いやそれ以上に……ゴミ問題が解消された。物質の原子レベルでの分解と再利  
用は、すべての都市で懸念されていたこの問題を一挙に解決できた。まあ、オレにとって  
は街がきれいになったことが嬉しいのだ。

しかし、自分の所在が脅かされているとなると、話は別だ。オレは単なる物質の組成や  
光信号やプラズマ形成物の塊か？ いや、それ以前にゴミと同レベルか？

転ブにも短所はある。再形成する目的地に、それと同じ量以上の原子をストックしてい  
なければならぬことだ。無論その転ブから転ブした人間もいるわけだから、その人間分  
の原子は安定した分子にしてストックされる。そう、さっきのゴミの分と一緒にだ。安全  
に転ブするため、個人別の最新原子量を記憶したIDカードを使って、原子量の少ない目  
的地プースには転移できないという警告がなされる。

さらに、それぞれの転ブは残念ながら金や貴金属、重金属類の原子をほとんどストック  
していない。転ブ泥棒が起らないのは当然だ。地下のタンクを漁っても、純水とかヘリウ  
ムとか、苦勞の割には下らないモノしか手に入らない。

この点で転ブがもたらした社会変化は、オレの気に入っているところだ。ジャラジャラ  
した見栄っ張りな女がいなくなったからだ。ところで、若い女の子はこの新しいメジャー  
に敏感で、転ブを使う度に更新されるIDの総原子量を、友達と競ったりするそうなの、や

れやれ。

話がすまないな。転ブにまつわるオレの話のはずが、大嫌いな転ブの説明になっている。これではオレは転ブの営業マンじゃないか。

まあ転ブ自体を使えない営業マンなど必要ないだろうが、病気を良く知る医者と同じで、敵を知り己を知ればもって百戦危うからず、まあオレの気持ちはそんなところだな……。そつでもないか。

結局オレは自分の純粹さを大切にしたいくせ、そのこと自体にいらいらしている、耳年増の、単なる恐がり。

『ヴァージン』

そつかい、ああそつだろつとも。

オレは社会の波に乗れない、古ぼけた発想の持ち主なのかも知れない。

『そう言えば係長、写真を撮られるの、お嫌いでしたっけ？』

『そうそう、人によっては魂を吸い取られるらしいからなあ。ね、カカリチヨーさん？』

破瓜

破瓜

あの嘲笑をまた思い出してしまった。転ブを使わなかった最後の社員旅行、何年も前のことだ。

彼等の立場で考えれば、彼等の発想も分らないではない。転ブを使うと死ぬなんて考え方は、写真を撮られると死ぬといった馬鹿げた迷信と、さほど変わりはないのだろう。オレにしてみれば、こんな迷信にも少し共感してしまいそつだが。

しかし写真と転ブでは語るべき次元が違う。少なくともオレにとってはそつなのだ。写真は単に光学的な現象だから、物理的に被写体は何らの危害も加えられない。しかし、転ブは『オレ』自身を抹消してしまう機械なのだ。目的地にいるのは、オレと全く同一の『コピー』に過ぎない、と考えられないだろうか。オレにとって当然のこの解釈は、周りの言うようにやはり『おかしい』のだろうか。

転ブで『コピーされた』者は、その便利さを賞賛する。決して、『オレは一回死んだような気がする』などとは言わない。当たり前だ、コピー前の人間の知識をそつくりそのまま引き継いでるのだから。

周囲に先駆けて転ブを使用した元同僚の友人も『最初は確かに怖い、痛くも痒くもない。かえってリフレッシュした気がするよ』と、頑固なオレを懐柔したりする。転ブの普及前までは、彼とオレは共に営業の第一線を担っていた。が、今や彼は重役、オレは仕事も削られて解雇寸前の窓際族になってしまった。

たかが人間のコピーに、どうしてオレは揶揄されたり意見されたりせねばならないのだ？ いやこれは差別の裏返ししか、言っただけいけないことだったな。

時々、オレの意見を最後まで聞いてくれる奴もいた。しかし奴等はそこから先がおかしい。やれ魂は別のレベルにあるのだ、意識体は異次元に存在しているのだ、現代科学に無い用語でもってオレを説得しようとするのだ。

そう言えばどこぞの和尚さえ、『御仏を信ずればいのちは一つ』とか言って転ブを容認していたな。待てよ、あれはローマ法王だったかな……。まあ転ブに反対しちまったら、没落は目に見えているからなあ。

しかし最近は、そんな親身な説得も無くなった。転ブ未使用者の減少につれて、『ヴァージン』という揶揄は流行語の普通名詞から、直接オレを指す固有名詞、陰口を叩かれるときのあだ名のようになってしまった。

ときどき思っ。オレは、もはや周囲から笑われるだけの存在なのか、と。

オレと同じく転ブを使わない者もごく稀にいるが、どうしても相容れない。大体が宗教家か文明を嫌う偏屈者、最悪の場合反動政治団体だ。オレはさしたる信仰心もないし、パソコンも一般業務程度なら使いこなせる、思想を言い訳にした暴力なんてもっての他だ。

偏屈者はともかく、集団は困る。

いたって少数派、しかも大方は反体制側の集団が転ブ反対を唱えているので、オレ自身はますます周囲から白眼視されてしまう。いい迷惑だ。彼等は反体制の頭数を増やすために、それを常套句にしているに過ぎない。

そんな見地からではなく、『個』の生死自体の危惧から反対を唱える者は非常に少ない。まったく　オレはどっしりようもなく孤立している。

仕事を終えて、今日も廃業寸前の、鉄道の駅に足を運ぶ。

改札前に設けられた華やかな転移ブースセンターを通りすぎると、恐ろしく年老いた改札員が、震えた手で切符を、切る。自動改札をくぐるのでも、スタンプを押すのでもない。彼はずっとこの駅の変遷に立ち合ってきたのだろうな。多分死ぬまでこの時代遅れの交通機関に付き合っつもりなのだろう。

改札を抜けると、実に寂れた世界が体を包み込む。異臭、ゴミ、埃。壁は『転ブ反対！』のビラが何枚も闇雲に重ねて貼られていて、剥がれかけのもあれば風化しているのもあり、その主張がよけいに空しく感じられる。

ホームにはオレと、一人の少し乱調気味な老人しかいない。やがて、彼が意味不明の叫び声を何処へともなく発し続ける中、二両編成の電車が五十分遅れで到着した。ここ半年

ほど、時間通りに来たためしがない。この電車の外観も駅と同じ、数々のビラに覆われている。扉は開いたままだ。

全くアナウンスの無いまま、いたって適当に電車は進み出す。さっきのつるさい老人は、乗らなかつたようだ。乗客はこの車両にたつたの三人。最盛期には一日の乗降客数が世界で五本の指に入っていた、そんな駅から乗ったとは、とても思えない。一人はやけに周りを見回す神経質そうな若者……若い奴が前の車両以外に乗るのは珍しいな。後の二人はめいめいに飲んだくれている老人か、二人とも寝ている。一日中、この環状になった線路をぐるぐると回り続けているのだろう。

前の車両には、集団で騒いでいる若者達が乗っている。二か月程前から前の車両を溜まり場にしているようだ。たまに酔っ払った奴が窓から嘔吐している。

往時の活気はこの電車には無い。そのやる気の無さは速度にさえ表現されている。二、三年も前の週刊誌の中吊り広告が虚ろにはためき、床には読み捨てられた雑誌や新聞に混じって、空のボトルや雑多なゴミ、吐瀉物や大便、犬の死骸まである。あかりもエアコンも扇風機も無い。車内アナウンスも駅と同じく、無い。

郊外に延びる路線に乗り換えた頃には、夕闇が迫っていた。ようやく、二十ワットに満たぬ電灯が灯き始める。とはいえ、申し訳程度の白熱灯で、蛍光灯の代わりに天井に裸の

まま取り付けられたものだ。理屈は分らないが、電車の速度に合わせて灯いたり消えたりする。停車時にはもちろん灯いてはいない。扉の傍に立っただけで、電車が速度を増したときを狙って、比較的きれいなシートに座るのだ。

しかしこの路線に乗ると、オレはとても安らぐのだ。妻のいるわが家への道のりを、かみしめる気分になれるからだ。車窓からの夜景もなかなかきれいだ。街中にある『転ブ』のことを思い出すとゾツとするが、それでも今日の仕事は終わり、オレは家に帰るまでの道のりと時間をここでゆっくりと費やすことができるのだ。

懐古主義と嘲りを受けても構わない。言うなればこの時間はオレにとって、おだやかな祈りの時だ。通勤ラッシュが当り前の時代には、こんな気持ちになることなどなかつたはずだ。あの頃の通勤時間は、ほぼ強制的に必要な時間だった。今のオレは自主的にこの優雅な時間を選び、満喫しているのだ。そのはずだ。

結局 よくあることなのだが 家の最寄り駅の手前で電車はストップした。小一時間ほど自分の足で歩かねばならなくなった。

歩く。なんて素敵な言葉だ。だが、この言葉もどんどんその範囲を狭めてきている。水戸黄門の歌詞や結婚式の祝辞程度に使われる、形式上の言葉になっていくのだろう。昔『汽車』や『船』が普段ロクに使われなくなっても、情緒を醸し出すためたびたび歌の中の世界に登場していたように。その辺りを作詞家の連中もよく心得ているようで、今どきのヒ

ツト曲で『転ブ』が歌われた試しなんぞ、無い。隆盛を一瞬で通りすぎたポケベルより情緒が無いとは、ざまあ見るだ。

そう言えば『切符を切る』というのは、なかなか通りのいい言葉だったな。

……こんなやつかみ半分の自己正当化を続けているうちに、家にたどり着いた。なんてこった、オレは『歩くことを楽しめるオレ』を大事にするあまり、『歩くことを楽しむ』ことを忘れていた。損した。あー、損。待てよ、今損したと思ったら、転ブを使っている奴に負けたことになる。いや、なかなかうまいことを考えていたものだ、人間たるもの、こういった自由な時間を持つてだな、自由な発想を広げることがだな……、その……。

こんな下らない煩悶をすぐに吹き飛ばしてくれたのは、妻の笑顔だった。

「お帰りなさい」

ああ、何という笑顔だ。まさに毎晩起る奇跡のようだ。

「また電車がストップしてね」

「それは大変。大丈夫でした？」

「この駅の近くだったんで、大したことはないよ」

この二十年間、本当に尽くしてくれたオレの誇りの妻だ。二十年間といっても、十年ほど前から 転ブが世に出回りだした頃からの方が、より妻への想いは強くなっている。

妻は、オレが転ブを利用しないこと、引いては出世コースから完全に外れてしまったこと

に関して、ただの一度も不平を漏らしたことが無いからだ。

そう、ずいぶん昔、こんな装置が世の中に出来たときに、話したことがあった。当時のオレは自分で言うのも何だが、怖いもの知らずの腕利き営業マンだった。そんなオレがこの機械について、

『怖い』

と妻に言ったのだ。妻にはオレの言葉が異常なものに聞こえたかもしれない。当時のオレも本当の弱音じゃなくて軽い気持ちで言ったのだが。

あの言葉はオレの末路と、オレと共に人生を歩む妻の運命に対する予言でもあったのだ。それを妻は、受け入れてくれた。今もなお、それは続いている。妻は転ブの話を一切オレにしないし、明らかにそのことを避けている。テレビで転ブ関連のニュースやCMが流れると、オレ以上に顔を強ばらせて部屋の隅を睨みつけたり、ひどいときにはチャンネルを替えたりするのだ。そしてオレには取り繕うように、優しい声を掛けてくる。巨大な敵に、妻という味方を得られたように思えて、頼もしい。絶え間無く寂しい人生の中に、わずかな、しかし確かな光を感じることができるのだ。

オレには子どもがいなくてよかったと思う。こんな人口の二パーセントにも満たない『転ブ非利用者』など、子どもは誇りに思う訳など無いのだ。反対に、もしオレの我欲から、彼を『転ブ非利用者』として育てたとしても、彼が悲惨な人生しか送れないことは明白な

事実であり、それはできない。オレは、強いて言うなら、人類の進化から遠ざかった淘汰されるべきものなのだ。  
そして妻は。

ああ、オレは、妻が『淘汰されるべきもの』だなんて、思えない。しかし実際のところ、どうなんだろう。

彼女がそれを使っているかどうかは、オレが何年も聞けず仕舞いになっていることなのだ。

もし使っていないなら 非常に少ない確率だが、彼女はオレと同じ古いタイプの人間で、この人生の旅路を、奇跡的に巡りあった伴侶と共に過ごしているに過ぎない、あるいは、夫であるオレの意見を受け止め、夫婦であるが故自分もその制約を甘受している、か。

もし転ブを使っているのなら、せめて夫と一緒にいるときには彼の嫌いなそれを一切口にしない、自分は利用しているという罪悪感の反動から、その場しのぎの優しさを見せているのか。

しかし、オレにとっては、こんなことはどうでもいいんだ。

これ以上、妻に求めることなど何もないのだ。妻は十二分にオレを愛してくれている。

破瓜

それで十分じゃないか。それに……こんなことを聞くのは怖いじゃないか。妻がそっくりコピーに入れ替わってるなんて。 オレは転ブが広まって以来、すっかり怖いものが増えてしまったようだ。

ええい、いまましい。

しかし オレは自分一人の思惑で、人間社会の推移をねじ曲げるつもりは毛頭ないし、その方法も、全く思いつかない。今は、少しでも居心地のいいように人生を送れたらそれでいいんだ。

夕食の後、妻の淹れてくれたコーヒーを楽しんだ。

「やっぱり家で飲むコーヒーが一番つまいよ」

使い古したこの言葉を、妻はいつも嬉しそうに聞いてくれる。

妻は最近始めた編物を広げ始めた。

セーターかな。

部長から海外出張を命じられたのは、この二週間後だった。

破瓜



ガタガタガタガタ。

オレは今飛行機の中にいる。ちなみにさっきのは擬態語じゃなくて擬音語だ。飛行機が嫌いでオレが震えているんじゃないやなくて、離陸以来ずっと、飛行機自体が震えているのだ。

予期してはいた。部長　この男もオレの同僚だったが　に出張を告げられて以来、飛行機を利用する危険性についてはめっちゃめっちゃ懸念していた。転ブで廃れたのは、電車やバスだけではない。一番打撃を受けた交通機関は、最も新しく、最も速く、最も遠くまで人間を運べる、これなのだ。航空会社の株価なんて、とっくの昔に額面割れして、今は雇用問題からだろう、仕方なく何便か飛ばしているに過ぎない。あ、もつとも第一線のパイロットやスチュワーデスなんてのは、さっさと見切りつけてこの業界から去っていつてる。だからこそ、怖いのだ。

しかしながら、オレはどうしてもこの飛行機に乗らねばならなかった。部長がわざわざ手配してくれたのだ。彼はオレへの憐みや優越感を押し隠して言い切ってくれた。

「これがオレにできる、君への最後のチャンスだ」

そりゃ隣国の語学はマスターしていた。以前に何度も行ったところだ。しかしそれだけならいくらでも代りがあるはずだ。オレでなくちゃあいけない、なんて仕事でもない。

しかもこの国には陸境はない。転ブ以外の交通機関では、飛行機か船でしか渡海できない。船はこの場合考えに入れられない。一週間に一度の便、そのために日程を調整して…

…普通はもうこんな間抜けなことはいらないのだ。転ブで現地に行けばいい。それをわざわざ、オレに差し向けてくれた。

こついつたことをわざわざしてくれるのは、そろそろオレの肩たたきが始まったということだ。自分の惨憺たる業績から見れば、百も承知のことだった、が……。まさかこんな不合理な方法を取るとはね。

彼もオレがこの仕事を受けるとは思っていなかったんだろうが、そうは問屋が卸さない。こつちにも生活があるんだ、転ブの使えない中年に再就職先などある訳がない。冗談じゃねえぜ、全く……。オレは上着を脱いで、ベストのワンポイントを眺めた。こんな細かい糸でよく編み込んだもんだなあ。妻は最高だ。簡単に辞めれるもんか、そう、彼女のためにも。

飛行機は予定の時刻になっても、着陸態勢に入らなかった。

というよりは、着陸態勢を回避してもう一度中途半端に高度を上げて、延々上空をぐるぐる回っているようだ。掃除のおばさんにも似た大阪弁のスチュワーデスは、空港のスケジュールが乱れたんちゃうか、と言っていたが、それも怪しい。スクラップの飛行機が時折り置き去りにされてはいるが、空港なんていつもガラ透きじゃないか……。

まあ、昔から飛行機に乗るときには少しナーバスになるし、オレの考えすぎかな、と思  
い過ごすことにした矢先。

やけに訛りのきつい、機長のアナウンスがあった。どうやら何本かの車輪が出ないらし  
い。

乗客の顔が一気に凍り付いた。

こういった時、自分の取る行動には笑ってしまふ。オレは自分がどういうリアクション  
をしたらいいのか分からなくて、ただ周囲を眺めていた。

しばらくは、みな一様に啞然としていたが、太った男が立ち上がってスチュワーデスに、  
「機長を呼べ」と怒鳴ったのを皮切りに、各自それぞれの やや過剰な反応を示し始め  
た。頭を抱え込む奴。念仏を唱え始める奴。緊急事態のマニュアルを読んでそこらを点検  
し始める奴。無理にリラックスしようとしたらしい、最初から付いてない音楽サービスに  
怒り始める奴。結構いたのが、手帳などに何やら書き付けている奴。モバイルパソコンと  
かPDAなんか使っちゃ逆効果だつてば。隣の奴、なんでゲームなんかし始めるんだ？ お  
いおいそこは喫煙席じゃない……。

しかしそんなに笑ってもいられない。自分自身に降りかかった災難には間違いないのだ  
から。何か飲んで気持ちを落ち着けよう スチュワーデスを呼んで、水割りを頼んだ。

破瓜

破瓜

飲料のサービスさえ無くなってしまっていることをすっかり忘れていた。

「え。……そしたらお客さん、私と一緒に飲んでくれはる？ ちょっと内緒で、持ってき  
てますねん」

断った。今スチュワーデスを酒を飲まれては困る、生き残る確率は増やそうよ、そんな  
ことを言って説得した。このおぼさんは不満げな顔をして去って行った。だいたい死ぬか  
もしれん時に、妻以外の、こんなおぼさんと酒を飲むなんてオレには考えられない。ちな  
みに、妻は全くの下戸で、だからオレも家での晩酌はコーヒーにしているのだが。

しかしあのおぼさんも、一人の人間としては不安なのだろうなあ。だいたい、あの体た  
らくからして、スチュワーデスとしてのまともな訓練など受けているはずがない。だから  
周囲に気を配る責任感より先に、自分の逃げ場を探してしまうんだろう。オレの逃げ場は  
？

またベストのワンポイントに目を遣ろうとした時、いきなり機体が斜めに傾いた。さっ  
きのおぼさんスチュワーデスとまた口論していた機長呼べオヤジが、抱きあって横に吹っ  
飛んだ。

このまま墜落かとも思ったが、機体は下降している訳ではなかった。強引な旋回だった。  
「えー、ただ今本機はア、遠心力でもってスなア、車輪を出そうと、まアこうゆう訳で

スてエ、ハイー……どおうりゃああああっ!!」

この機長であるオヤジがこの出身かさっぱり分からなかったが、まあ大方の事情は飲み込めた。まだ脚は全然出てなくて、このオヤジは明らかに、全部で五本ほどのジャンボジェットの脚のいくつかが、さほど期待はできない旋回運動で、出る、と思い込める奴で、それはあるアクション映画を週末のテレビで見たからで、この映画に出てきた複葉機は、急旋回で脚を出すことに成功していたが、ジャンボジェットでそれと同じことを彼がやりたがっている訳で、あんまり脚が出る確率とは関係ない訳で……。

「オレ、死ぬ、なあ」

イカした機長の操縦で、乗客は一層パニックに陥った。オレが頭の中で赤信号を灯したより先に、他の客は口々に喚ぎ始めた。静かな奴もいただろうが、喚き散らす奴の声のほうが目立つのでこれは仕方がない。品の無い叫び声か泣き声三分の一、それをつるさいとか落ちて着けとか言う声三分の一、念仏三分の一……。

あ、そう言えばこんな非常事態に、簡単に対応できる救命器具が、あった。他でもない、送信専用の転ブだ。あるのなら、今こそ使わなければならぬ時じゃないか。

確か最後尾にあったはずだ。使っ決心もつかぬまま、席を立った。後尾部を見ると、

一人の男がトイレのような一室から出てきて、頭を抱えて呻いていた。横をすり抜けて彼の出てきた扉を見ると、「脱出用転ブース」と書かれていた。しかし、扉は落書きに満ちて真っ黒、おびただしい暴力によってかなり変形していた。乗客全員の憎悪が、煮染められているかのようだった。

期待はできないな。できないが、開けるしかない。案の定ブースの中は、見なければ良かったと思わせるに十分だった。なんてこった。

オレはよろよろと席に戻り、周囲のどうしようも無い『同志』を恨めしく見回した。そこにいる彼等が、直接転ブを壊したとは言えない。だが、似たようなもんだ。これでは自殺するのと同じじゃないか。こんな奴らに殺されるのか、オレは？

たまらないな。オレは妻のことでも考えよう。ごめんな。オレが転ブとかいうものを使わないばかりに、不憫な思いをさせてしまったなあ。オレが死んだら、君はどうやって生きて行くんだろう。あ、そうか。生命保険。確か二億五千万。はははは、偉く豪勢に掛けてたもんだ。アレ？ あーだめだ。去年転ブIDカードを提示しなかったことで、非利用者なのがバレちまったんだ。いや『転ブ非利用者』じゃなくて『電車通勤者』か。こいつが免責事項になっちゃったんだ、確か他の交通機関も一緒だったな。事後法じゃないかって、かなりゴネたけどなあ。電車の通勤が危険視されるとはなあ。愛煙家の癌保険みたいな話だよなあ。

え？ この旋回やめる？ 今から胴体着陸するから避難姿勢をしてくれ？ それ、さっきからやってるよオレ。

アレ、なんの話だ？ と、とにかくあいつには死んでからも迷惑かけちゃったなあ。なんせ海外旅行保険も高すぎて掛けられなかったしなあ。そりゃそうだよ。誰が電話掛けるのに保険掛けるよ？ 航空会社も賠償は、ケチってくるだろうなあ。だって飛行機のメンテナンスも、ロクにしてないくらいだしね。なんでこんなに不便な世の中になったのかなあ。いや、オレ以外のみんなは便利になってるぞ。まあみんながハッピーだったら、不幸面したオレなんて、いなくなった方がいいのかなあ。

違うっ！

オレは妻のことを想いたいんだっ！

それにオレは彼女のためにも、まだ死んじゃいけないの！ 死ねないの！

大体オレは彼女との生活のためにこれに乗ってるのっ！ 何で死ななきゃいかんのさ！ 待つてる、ちゃんと生き延びてやるから……。

大音響が起った。後は覚えてない。

破瓜

破瓜

「おい。お客さん。お客さんテバよ」

誰かがオレの肩を揺する。聞き覚えのあるその声は、遙か上の水面から聞こえてくるようだった。オレの意識はその海の中を浮上していった。

「やっとこ起きなさったけ。お客さんが最後の乗客だナもし。あんたが出ると、ワシも出れんのっしや」

見上げた虚ろな視界の中に飛び込んできたのは、陽に焼けた初老の顔。

機長だった。

意識を戻したオレは立ち上がろうとしたが立てなかった。

「こ、腰が抜けたかな。立てないや」

「まったくしょうがねえべや。ほんね」

「すまない」

差し出された手を借りてようやく立ち上がれた。全く情けない。死ぬことが大きな壁だったさっきまでは緊張でびりびりしていたのに、生きている今は腰抜けか。しかし身体は全く無傷のようだ。五体の感覚もほぼ異常無した、まだ朦朧としている頭を除いてだが。「すまんけど、あそこまで急ぐっべや」

手を離されて少しふらついたが、ここで弱音は吐けない。オレは生きるんだ。非常口には、何回もフィルムで見せられたあのオレンジの滑り台が付いていた。

「ここを降りる時にはすなア……」

「わかってますよ、機長」

苦笑して機長の言葉を遮り、オレは滑り台を滑り降りた。勢いが付きすぎた。ガスの圧力が低かったのか、思ったより滑り台はへこんでしまい、しかも手荷物がオレの行く手を塞いでいた。オレはしたたか足と腰を打ってしまった。

「あ痛て」

滑り台の左側の壁にしがみつきながら、ずるずると機長が降りてきた。

「あんたは人の話さ最後まで聞かんさけエ、そがいなことなりよるじゃあ」

「これは、避難用具か？ 危険用具の間違いじゃないのか!？」

「負け惜しみもエ工けんど、早よ逃げんと爆発するかも知れんっしや!」

「え？」

「ほれ、道を塞がんと、早よ立ちんしやい!」

慌てて立とうとした途端、右足に激痛が走った。

「うがっ……!」

「大丈夫かなもし」

破瓜

破瓜

「っ大丈夫、何とか、走れるだろおおあ痛ててて」

「ならいいけんど。ほれ、肩貸しちやるけんね」

「、ありがとう」

びっこを引き、機長の肩を借りながら、何とか走った。

「アレ？」

「どうした、機長」

「やばい。伏せるっちゃ!!」

一瞬後、大爆音が轟き、すごい風圧を踵と跨間に感じた。がらんかん、と頭の横五メートルに、飛行機の翼の破片が落ちてきた。

「機長……何で分かった？」

「……何か変な音が聞こえたべ」

「そっかい」

ただの勘、みたいだったけど。

這いつくばったまま、機長とオレは燃え盛る機体を見返した。オレが降り損なった滑り台が炎の中でぐにゃぐにゃになっている。

「ま、ただの勘だべさ。……あ、いけんいけん。また走るっしや」

「どっして?」

起き上がりながら機長は答えた。

「隣のタンクに火が着いたらまた爆発っしや」

ヒヤヒヤもので走りながらオレは、少し間拔な疑問を口にした。

「さつきは伏せて、今度は逃げるのか？」

「そっから先は、それこそ勘っしや あ!!」

……空港のエントランスにげいせい言いながらたどり着くと、他の乗客が一斉に拍手した。機長はマエストロ張りのお辞儀をしていた。そう言えばメチャクチャながらもオレ達を無事に生還させたのは、何をしても彼の操縦だったんだな。

スチユワーデスのおばさんはさっきの機長出せオヤジにすがりついて、一緒になって拍手していた。酔っ払っているのか、二人とも顔が真っ赤だ。おばさん、どうして君が、オレより先にそこにいるんだ？

オレは何だか馬鹿らしくなって、燃えている飛行機を見ていた。しばらくして、右足の痛みを思い出すと同時に、ある疑問が湧いてきた。隙を見計らって機長に聞いてみた  
少し丁寧に。

「乗客に怪我人はいたんですか」

「軽いカスリ傷とオ、あだま打った人くらいだども、みんな医務室にハア行きなすったサア。氣イ失うとった人もおったけど、その人は空港側のレスキューさんが転ブで病院さ送りはったわ。あ、その言えは、あんだも足怪我しちよったね。病院行ぐけ？ ほんね。

そこ、転ブあるでや」

「い、いや。結構」

周りの乗客から失笑が漏れた。オレはいつもの侮蔑と思つて表情を強ばらせた。それを待つていたかのように、機長はオレを諭した。

「そんなら変な顔せんでもよか。この人等みいんな、転ブが嫌いでワシの飛行機さ乗つてくれちよるけん、ねエみなしゃん」

皆それぞれにかぶりを振っている。そう言えばそうだったな。オレはなんだか照れ臭くなつた。何だか笑えてきた。

「そ、そうでしたねエ？」

乗客達は皆吹き出して、笑い声が周囲に満ちた。オレも笑つた。みんな必要以上に怖がり、今の文明を拒絶している者同志だったのだ。

しかし。

皆とうち解けあつた今、新たに生じてきたこのわだかまりは何なのだろう？

オレも彼等と同じ、自己を大事に思うあまり周囲から孤立した人間のはずだ。あの時、

脱出用の転ブを確認しに行ったからだろうか。それだけで彼等とは異質だとも言い切れないが、考えようによっては、裏切り者みたいなものかも知れない。あの時、オレは彼等を、転ブ以上に憎悪したのだ。憎悪してまでも、生を諦め切れない自分が、そこにはいたのだ。

何のために？

我々は本当に、こんな力無い、自嘲の中に埋もれることでしか、癒しを得ることはできないのだろうか？ もしかしたらこんな疼きは、ここにいる誰もが感じていることかも知れないが……。

彼等と一緒に笑っていて、オレはだんだんと、その場をとり繕っているような空々しさを禁じ得なくなってきた。

いたっておざなりな空港内の医務室での診察や、手荷物などの賠償要項へのチェック、それから入国審査を受けて、オレが空港の玄関まで出てきたのは、夜の帳が降りた後だった。

破瓜

破瓜

「おう、アンダば、足っちゃもつ、大丈夫ケエ？」

後ろから声を掛けてきたのは件の機長だった。

オレは礼を述べた後で聞いてみた。あなたの操縦技術は素晴しかったが、どうも腑に落ちない。いつからこの仕事を始めたのか、と。

「いんやア、ばれてしもつたかいのう。タクシーの運転手さやって、儲からんようになつちよるところ、パイロットさできるちう話さ聞いて始めたんら。いんや今日のは迫力だつたべえ、痛快、痛快」

「た、タクシー？」

「一流のパイロットさんは仕事替えて、いんようになつてもつたけんね。会社も何か運転でけたらそれでよかんべちゅうことにしたらしいんだぎゃあ」

なんだ？ この業界では何が起つてるんだ？

しかし彼には合点がいった。あの車輪を出すやり方も素人臭い発想だし、この『運転手』じゃあ英語の無線伝達も、今日のような不測の事態には対応しきれなかっただろう。空港側の緊急態勢も遅れてしまい、あの大炎上か。しかしこの機長、船長のような気概をもっていたことは、確かなようだ。

オレは何となくこの怪しい方言を操る機長が気に入ってしまった。一緒に飲みにも行かないかと誘ったが、

「今がら港さ行つてえ、船長さやるさかい、ダメじゃなもし」

と返されてしまった。忙しい奴だ。

「それよりあんだ、時間ねえべ。あんのバスさ最終連絡せよ」  
「え？」

こんな時間帯に最終連絡　オレはしばらくどぎまぎしながら考えた。これだけの大空に降り立ちながら、オレは自分が文明の僻地に取り残されてしまったような気がした。そうだ。もう空港というものは、無用の長物でしかないのだ。オレが若い頃異国への期待を込めて入り、優秀な人材が四六時中活躍し、国々の首脳が降り立ち、芸能人が記者に囲まれ、こんなところで離婚する奴さえいた、それは過去の幻なのだ。もうターミナルとかウイングだとかインターナショナルだとか言う横文字さえ、虚しい。今や都市の中心から離れたただの廃虚であり、遺跡でしかない。

「……わし、いぐべ。あんだ、こねえと一晚ここで明かすことなるばってん」

「ああ……それもいいな」

ここを動いてはいけないような気になっていた。

機長は話にならない、とでも言いたげにかぶりを横に振りつつ、「こう言い残した。

「わしものう。転ブちうやつは、どうも好きになれんでの。大体飛行機も飛ばん世界なんか、ロマンのカケラもあらへん。しかし今日はちとドラマチック過ぎたかのう……達者で

な

雄弁な文句の割に、機長は慌ててバスに走っていった。オレは彼を目で見送った。フフ、ロマンか。こんなロマンじゃ命がいくつあっても足りねーぞ。どうもアイデンティティの崩壊しまくった方言だったなあ。ま、この転ブ時代にローカリズムなんぞ噴飯ものだが。しかし一体何モンだ、ありゃあ。

オレは、そんなことを考えつつ、寄る辺なく空港の玄関ホールに舞い戻ってしまった。ほとんど明りの無い中、電源の入っていないエスカレータを、軋む足取りで見送りロビーへと登っていった。

傾斜の緩い横の階段を使えばいいのに、ついつい茶目っ気を出してしまった。若い頃を似たような空港のエスカレータを、胸ときめかせながら昇っていった頃の自分を一瞬思い出したのだ。老いて、傷ついた身体には愚かななぞり書きだった。かえって自分の時代が完全に終わってしまったような気がしてしまった。

登り詰め、大きく開かれたガラス窓に近づくと、燃え尽きた機体が見えた。ロマンの死骸だった。今日は現場復旧も取り調べもしないらしく、薄暗い滑走路に遠く影を落としている。

オレはがらんとした誰もいないロビーに唯一人腰掛け、しばらくぼんやりとその残骸を眺めていた。



仕事の書類もモバイルパソコンも携帯電話も、燃えてしまったなあ。会社に連絡しても、もう誰もいないだろう。ここ数年残業していたのはオレだけだしな。考えてみれば一般の通話端末なんてない、転プとネット端末だけだ。部長にメールでも送っておくか。無事到着、なんてね。

予約してあるホテル　このホテルさえ今や斜陽どころか凋落産業で、予約したのは予算の関係上置屋のような得体の知れない……に連絡を入れる気も、その手段もここにはなかった。

いつしかオレは、暗闇に浮かぶ飛行機の残骸がいとおしく思えてきた。おまえも、一生懸命ここまで飛んで来たんだよな……。

喉が乾いた。まだ自動販売機が稼働していた。隣国の言葉で書かれたその缶コーヒーの蓋を開ける。蓋の形が変わる前　あの時は、まだ世界はこんなに複雑じゃなかったよな。うえつぶ、なんじゃこりゃ。

あまりに長い間人に飲まれることを待ちすぎた缶コーヒーは、とっくに変質していた。ミルク成分が固まつていて、オレの鼻っ面を一気に襲ったのだ。

顔を手で拭い、なんだか酸っぱいにおいのある口の中の異物を夢中で吐き出した。底の製造年月日は、　六年も前じゃないか。勘弁してくれよ……。

一体何なんだ？

オレがこんな老人めいた郷愁に浸りつつ馬鹿やつてる間にも、世界は冗談めいた鼓動でどんどん変り果てていく。何の因果か、取り残された者はこの缶コーヒーのようにみるみる変り果てて、かえって金返せ状態だ。身体中軋むまで自分なりに頑張ったところで、最後には胴体着陸でドカンだ。憐れみは受けられても、決して賞賛はされない。

オレは何が楽しくてこんな気持ちにならなくちゃいんだ。

……神よ、もしいるのなら教えてくれ。こんなことまで試験だなどと言うのか？　それは強い者とか勝った者とかの、弱者や敗者をねじ伏せる詭弁じゃないのか？　そんなにオレをいじめて、楽しいか？

それともこれは、あんたのお眼鏡に適っているのか？　いや、神様は視力が悪いなんて聞いたことはねえな。とにかくよ、オレ　オレが確かに生きいきと生きていた時代そのものを含めたオレ　は、何だか、疲れ過ぎてしまったよ。今や片意地も張れない。圧倒的敗北ってとこだ。

その時代を共有しているはずの、乗客達　。しかし、彼等とは同調し得なかった。見たくない自分を彼等の中に見たからかもしれない。その中、唯一尊敬できたのは……。

機長。この時代に転ぶなしで人生を謳歌するには、あんたのようなムチャクチャな

個性と気概が必要だったんだな。オレはとてもそこまではできない、単なる小心者に成り下がってしまったよ。

オレは片手に、中身が残ったままの缶コーヒーをブラブラさせて、止めどなくオレの時代の滅びを感じていた。オレは目を閉じ、うつむいた。

やがて少し開いた瞼の向こうに、ベストのワンポイントがあった。いくつかのハートマークを交差させ、その上に大きくゆったりとした二つの波をあしらってある。彼女のお気に入りのデザインだ。

妻か。

このベストも使用一日目にしてエラくボロボロになってしまったな。マズイ。妻になんて言えばいいんだ。あ、これは飛行機が墜落したと言えはいいか。上着、機内に置いてきちゃったな。

そ、そうか。彼女に連絡しないと　って、ダメだ。さっきの会社と同じだ。

ふっ。

頭を上げた視界の中に入ってくるのは、ロビーの片隅で青白く光る『転ブ』だけだった。

終わらせよう。

オレは何者かにとり憑かれたように、そこを指してふらふらと歩いて来てしまった。

この向こう側に

妻が待ってる！

出会った頃、恥じらうような薄桃色の頬をしていた君。

どんな時も、誰にも負けない微笑みを見せてくれた君。

初めての夜、満面の喜びを潤んだその瞳に浮かべていた君。

求婚した時、大きく瞳を見開いてオレを映し込んでくれた君。

結婚した時、どんな運命も一緒に歩いていこうねって言った君。

懐妊した時、どんな名前が好きって聞いて少しはにかんでいた君。

時おりおり、凝りすぎた料理に挑戦しては失敗してオレに謝った君。

流産した時、病院のベッドでオレの胸の中ひたすら泣きじゃくった君。

昇進した時、まるで自分のことのように喜んで夜中にワインを買った君。

そう、あの時、

怖いねと言ったオレに、

そうねと答えた君。

君がいたから、君がいたから、君がいたから、君がいたから、君がいたから、

社会の変化におののきながらも、二人でいる場所はいつも安らぎに満ちていた。辛い歴史の中で、お互い皺も増えたけど、オレを見つめる澄みきった君の瞳は、今もなお変わらない。今のオレは、もしかしたら、オレはそんな君がいたから、人間らしさを失うことなく今日までやってこれたんだ。

何を今さら、と誰に笑われようが関係ない。オレにとって大事なものは、君のために君のそばにいたいことなんだ。この愛が新奇な文明に振り回されるなんて、下らないこと。これ以上オレのわがままで、君に陰を背負わせる訳にはいかない。それに、たとえ死んだとしても、コピーであつても、オレは君を愛し続ける。これだけは確実だ。それだけで十分だ。そしてもう一度始めるんだ。君とのロマンスを、より純粋なたちで。ねえ、これは敗北では、ないだろう？　ないと言ってくれ！

いやそれより、今はただ、

ただひたすら

君に逢いたい

微笑んで欲しい

## 破瓜

## 破瓜

何度もシミュレートしてきたように、手が自動的に動く。国番号を頭に付けて、暗記している最寄りの転ブナンバーを正確に入力する。目的地側の待ち数。ゼロ、各原子量。OK。すべてよし。実行ボタンに指を延ばしたときにやっと無我夢中の自分に気が付いたが、結局その指の勢いを止めなかった。

いいや、やっちゃえ。

低い唸りと眩しすぎる光が、オレを包んでいった。

『破瓜』

1990~Aug. 29, 1999

Vertical Edition: Dec. 4, 2000

A Nat sui

Su i t a Q t y

Winged-White:

<http://www.ne.jp/asahi/winged-white/>